

# 北海道教育大学釧路校・地域社会と環境研究室における北海道浜中町を フィールドにした持続可能な地域づくりへの貢献を志向した 教育研究活動について

－サステイナブルツーリズムをテーマにした調査研究活動（2013年度）の過程－

平 岡 俊 一  
(北海道教育大学釧路校)

Research and Educational Activities-Oriented to Contribute to Sustainable Community  
Development in Hamanaka Town, Hokkaido by Department of Regional Society  
and Environment, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education.

Shunichi HIRAOKA

## 【概要】

北海道教育大学釧路校・地域教育開発専攻「地域社会と環境研究室」では、2013年度の教育研究活動において、浜中町での持続可能な地域づくりにつながる観光（サステイナブルツーリズム）をテーマに、地元環境NPOをはじめとした多様な地域主体と連携した調査研究を行い、その成果をもとに具体的な提言を行った。本稿は、その活動の過程を整理するとともに、その成果や今後の課題について述べるものである。今日、人口流出や産業衰退化等の地域社会の維持に関して深刻な課題を抱えている地域・自治体が数多く存在している。こうした地域の学校で教員として勤務する上では、学校、教員として地域社会の諸課題解決に向けた取り組みにおいてどのような役割を果たしていけるのか、といったことについて真剣に考え、実践を試みる姿勢やノウハウを有しておくことが不可欠である。よって、教員養成系大学においても、地域課題をテーマにしたサービスラーニング型の教育研究活動を展開する必要性は大きい。

## 1. はじめに

筆者が担当している、北海道教育大学釧路校・地域教育開発専攻「地域社会と環境研究室」は、環境保全を通じた持続可能な地域社会の形成（以下、地域づくり）をテーマにしており、これに関連する活動等が展開されている地域・自治体をフィールドにして、取り組みへの参加・観察、いわゆる「参与観察」を重視した教育研究活動を展開している。研究フィールドは、釧路市の近隣地域にいくつかあるが、その中でも、特に厚岸郡浜中町では、町内の霧多布湿原での環境保全活動を中心とした研究対象としながら、継続的に調査研究を行っている。2013年度、本研究室の3年生（8名）の研究活動<sup>(1)</sup>では、浜中町での持続可能な地域づくりにつながる観光（サステイナブルツーリズム）をテーマに、地元環境NPOをはじめとした多様な地域主体と連携した調査研究を行い、その成果をもとに具体的な提言を行うことを目的とした取り組みを展開した。

近年、大学の教育研究では、地域をフィールドにし、関連諸主体と連携して調査研究等を行う取り組みが、多様な研究領域において活発に展開されるようになってきている。その中では、単に地域に出かけ取り組みを見学するだけ、調査を行い知見を得るだけ、あるいは関係者からの情報提

供、助言などを得るだけで終わるのではなく、大学や学生側が、フィールドで得られた知見等をもとに、現場の関係者と連携しながら、その地域に実際に存在している諸課題の解決に貢献することを目指す、「サービスラーニング」に注目が集まるようになってきている。

津曲隆はサービスラーニングの意義について次のように述べている。「サービスラーニングは、学生が地域社会・企業で単に学ぶだけの一方的なものではなく、両者が対等な立場で、さらに互恵関係が生まれるようデザインされたものをいう。互恵的關係ゆえに、単に学ぶだけに終わらず何らかのアウトカムが要求される。そうした責務が課せられることによって、学生の側の学習行動は必然的に真剣なものにならざるを得なくなる。それが自己を成長させる能動的な学びを促す。他方、地域社会・企業の側においても、学生との協力関係によってそれまで抱えている課題の解決に結びつく可能性があり、サービスラーニングのメリットは大きい。」（津曲、2013：103）

本研究室における上記の研究活動も、浜中町が抱える地域課題の解決への貢献を志向しながら、地域主体と連携した調査研究を行うものであることから、サービスラーニング型の教育研究活動のひとつと捉えることができる。

筆者が勤務する、北海道教育大学釧路校は小学校教員養

成を主要な目的にしている。所属学生の出身地は全国各地に分散しているが、その中では北海道ならびに東北地方出身の学生が比較的多数を占めている。これらの地方には、人口流出や産業衰退等の、地域社会の維持に関して深刻な問題・課題を抱えている地域・自治体が数多く存在している。小学校等において教育や学校運営を行う上でも、そうした地域社会が抱える諸課題を避けて通ることはできない。

したがって、こうした地域の学校で教員として勤務する上では、地域社会の諸課題に関心を有していることは当然のこと、学校として地域における課題解決に向けた取り組みにおいてどのような役割を果たしていけるのか、教員としてどのような貢献ができるのか、地域社会の多様な主体とどのような連携を図っていくのか、といったことについて真剣に考え、実践を試みる姿勢やノウハウを有することが不可欠であると考え<sup>(2)</sup>。

そこで、大学での在学期間中に、地域の学校以外の多様な社会経済活動の現場に入り込み、そこでさまざまな地域人材の声を聞いたり、共に活動に取り組むことなどを通じて、地域社会に存在している各種社会経済活動の実態や文化、価値観等に関する知見を獲得した上で、具体的な地域づくり活動に関与する経験を重ね、ノウハウを獲得しておくことが不可欠である。よって、教員養成系大学においても、学校教育分野以外の地域が抱える諸課題をテーマにしたサービスラーニング型の教育研究活動を展開する意義は大きく、これに関連する教育研究実践の活動過程や得られた成果、課題等の知見を整理しておくことが求められる。

本稿は、以上のような課題意識にもとづいて、本研究室において2013年度に北海道浜中町をフィールドに実施した研究活動の過程を整理するとともに、その成果や今後の課題について述べるものである。

## 2. 浜中町、霧多布湿原ナショナルトラストの概要

### 2.1. 浜中町の概要

北海道厚岸郡浜中町は、北海道東部、釧路市と根室市との間に位置する、面積423km<sup>2</sup>（東西33km、南北29km）、人口約6,511人（2010年国勢調査）の自治体である（図1）。1701年（元禄14年）に松前藩のキイタツ場所が開かれたのがまちのはじまりとされ、1906年（明治39年）に浜中村、1963年（昭和38年）に浜中町となっている（浜中町、2010）。

現在の主要産業は漁業と農業であり、町内の就業人口の約50%（2005年国勢調査）を第1次産業が占めている（農業695人、林業2人、漁業1,536人）。漁業は、昆布、サケ・マス、ウニ、ホッキなどを対象にした漁が、農業は乳牛飼育をはじめとする酪農が中心となっている。

町の東南は太平洋に面し、漁業が盛んな地域となっており、北部はなだらかな丘陵性台地を形成しており、酪農業



が盛んに行われる地域となっている。町の中央部を釧路市と根室市を結ぶJR根室本線（花咲線）と国道44号線が通っている。また、沿岸地域の中央部には、厚岸道立自然公園の一部であり、かつ1993年（平成5年）にラムサール条約（正式名称：「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」）の登録湿地となった霧多布湿原が存在する（写真1）。同湿原は、日本国内では有数の規模の面積（3,163ha）を有するとともに、「花の湿原」として知られ、浜中町の主要な観光地となっている。

先述したように、このような豊かな自然環境やそれをもとにした産業が存在することから、浜中町では環境保全や地域づくりに関連する活動が活発に行われている。例えば、次節で詳しく述べる認定NPO法人「霧多布湿原ナショナルトラスト」による霧多布湿原の保全活動のほか、「浜中町農業協同組合」（以下、JA浜中町）の存在があげられる。JA浜中町は、高品質な牛乳生産、新規就農者育成などをはじめとする酪農業の活性化を展開しているが、それ



写真1 霧多布湿原

だけにとどまらず、緑の回廊計画、イトウの遡上する川創り、酪農家による太陽光発電導入の促進など、地域の環境保全にも積極的に取り組んでいることで知られている<sup>(3)</sup>。

## 2. 2. 霧多布高等学校の概要

浜中町には、町立北海道霧多布高等学校（以下、霧多布高校）がある。今回の研究活動においては同高校も重要な連携主体であるため、詳しく紹介しておく。霧多布高校は、1951年に北海道厚岸高等学校霧多布分校として開校した。現在は普通科のみで、各学年1クラスずつという小規模校であるが、町立高校であることを活かした特徴ある教育を推進しようとしている。

そのひとつが「浜中学」である。これは1年次から3年次の3年間を通して展開する教育プログラムであり、浜中町についての知識理解を深め、地域について情報発信し、地域に貢献しようとする意欲や態度を育成することを目的にしている。具体的には、まず地元のペンション経営者、NPO関係者、役場、漁協職員などを講師として招いた学習等を行うことにより、地域の自然、社会、経済等について知り、その次に、浜中町を訪れる観光客を対象にしたアンケートなどの地域調査を自ら行い、それらで得られた知見をもとに、最終学年において浜中町での地域活性化策について発表を行ったりするものである。

## 2. 3. 霧多布湿原ナショナルトラストの概要

認定NPO法人「霧多布湿原ナショナルトラスト」は、「霧多布湿原のファンを広め、霧多布湿原を保全し、自然が豊かで持続可能な幸せな世界を未来の子どもたちに残す」（霧多布湿原ナショナルトラスト、2014）ことをミッションとし、ナショナルトラスト方式による湿原民有地の買取保全、環境教育の推進、自然と共存する地域づくり、に関連する活動を展開している団体である。

町内の若者、移住者等によって1986年に設立された「霧多布ファンクラブ」を前身団体としている。当初は、霧多布湿原でのスキーやカヌーなど、湿原に親しみをもち、楽しむことを目指した取り組みや民有地の借り上げを進める活動などを中心に展開し、2000年からは「霧多布湿原トラスト」<sup>(4)</sup>に名称変更ならびにNPO法人化した上で、全国から寄付を募り、それを原資に民有地の買取を進めるナショナルトラスト運動を実施している。2013年12月末時点では湿原内の民有地1,200haのうちの800haを買い上げるまでに至っている。

さらに、最近では霧多布湿原を活かした地域づくり活動にも積極的に取り組んでいる。その一環として、2005年からは、町が建設したビジターセンター「霧多布湿原センター」の管理運営を受託し、同センターを拠点とした環境教育活動の実践やエコツアーの推進、コンサート等の文化的イベントの開催、町の第一次産業に関する特産物のPR、それを活かした料理を提供するカフェの運営など、実に多様な活動を展開している。

同団体は、それらの活動によって、「第3回エコツアー大賞」（環境省主催）、「全国地域づくり推進協議会会長賞」（国土交通省主催）（いずれも2007年）などを受賞したり、多くの文献や論文などでも取り上げられるなどしており<sup>(5)</sup>、全国的にも市民主導型の環境保全活動の先進事例として注目を集めている。

## 3. 霧多布湿原ナショナルトラストとの関係構築

本章では、本研究室とナショナルトラストによる2013年度の活動の開始に至るまでの経緯について述べておく。

地域社会と環境研究室が浜中町（ナショナルトラスト）との関わりを持ち始めたのは、筆者が釧路校に着任した2010年度に行った研究室合宿でナショナルトラストを訪問し、同団体の活動の見学、関係者へのインタビューなどを行ったことがきっかけである。それ以降、定期的に研究室の演習科目等において、浜中町を訪問し、ナショナルトラストの活動に関する調査を行ったほか、同団体の仲介により、浜中町内で地域づくり活動に積極的に取り組む酪農家や漁業者の訪問を行うなどしてきた。

その一方で、ナショナルトラストからの依頼により、同団体が実施する活動に協力する機会も増えていった。例えば、湿原を軸とした社会教育事業<sup>(6)</sup>のアドバイザーを筆者が務め、事業に関連するワークショップのファシリテーター役を担ったり、住民対象のアンケート調査の実施・分析等を共同で実施するなどしている。また、上記事業においては研究室所属の学生がエコツアーに関連する企画会議、モニターツアーに参加したり、ナショナルトラスト主催のイベントにボランティアとして関わるなどしている。こうした両者の連携による活動のひとつの成果とも捉えられるが、2014年4月には、前年度に卒業した本研究室所属学生がナショナルトラストの職員として採用されている<sup>(7)</sup>。なお、筆者も2014年2月にナショナルトラストの理事に就任している。

また、これも先述したように、本研究室の教育研究活動では、ナショナルトラストが仲介・調整する形で、浜中町内で地域づくり活動に取り組む多様な人材、組織を訪問したり、交流を深めたりする機会をもったことなどを通じて、それらの主体とのつながりを形成している。その中でも特に、地元の霧多布高校とは、先述の浜中学を担当している地域づくり活動に強い関心を有する教諭と、ナショナルトラストの活動を通じて繰り返し交流したことがきっかけとなり、本研究室の学生が同高校を訪問し、高校生と浜中町における地域づくりに関するワークショップを定期的に開催するような関係性が形成されている。

## 4. 中間発表までの活動過程

### 4. 1. 研究テーマの設定

本研究室3年次の演習科目では、学生自らが、釧路近隣

の特定の地域を研究フィールドとして選択し、研究室メンバー全員で継続的に調査研究を行い、その結果をもとに地域の課題解決に関して何らかの提言を行うことを課題として設定している。

2013年度の3年生は、既にそれまでに複数回にわたり浜中町を訪問し、ナショナルトラストの活動現場を観察したり、霧多布高校での高校生とのワークショップを経験していたこともあり、全員一致で浜中町を研究フィールドとすることを決定した。研究テーマについては、これも先述した前年度にナショナルトラストが実施したエコツーリズムに関するモニターツアーに学生が関与していたこともあり、ひとまず「エコツーリズムと地域づくり」とすることにした。

なお、この研究テーマについては、その後、学生の間で議論を深めていく中で、自分たちが調査研究を行い、提言をしようとするツアーは、単に環境保全への貢献だけでなく、地域の社会経済活動の維持・発展にも寄与することを目指す、「持続可能な地域づくり」も視野に入れる必要がある、ということになり、一般的にはエコツーリズムに比べると知名度は低い、よりそのような意図に近い、「サステナブルツーリズム」という用語を用いることになった。

以上の決定を踏まえ、筆者からナショナルトラストに対して、浜中町において上記の調査研究ならびに提言を行いたい旨、さらに、ナショナルトラストと共同で調査研究を行いたい旨を伝え、協力を依頼したところ、快諾いただき、同団体との連携した研究活動を開始することになった。

指導教員である筆者は、研究室所属の3年生が上記の研究活動を実施することになったことを踏まえ、成果公表の機会となる以下の2つの場での研究発表を行うことを設定した。第一は、中間発表として、2013年11月に開催される「SCAN北海道学生研究会・第4回合同研究発表会」での発表、第二は、最終発表として、浜中町霧多布湿原センターでの町民公開型の研究発表会である。

「SCAN北海道学生研究会」は、釧路公立大学の学生が中心となって設立した学生団体で、学生による地域社会への政策提言を推進していくことを目的としている。毎年、同大学において「地域」をテーマにした大学生による研究発表会を開催している。2013年は10大学、27グループからの発表があった。本研究室では、2011年度から毎年参加し、研究発表を行っている。

これらの研究発表の実施以外の、例えば、より詳細なテーマ設定、調査研究活動の方法、スケジュール設定、等については学生側で自主的に検討、決定することとした。学生たちは、研究活動を本格的に開始するにあたり、研究の視点について議論する中で、提言するツアーにおいては、単に外部からの来訪者だけが浜中町で楽しむことを目的とするのではなく、ツアーの運営等に参加することを通じて地元の住民や各種組織関係者自身が浜中町の価値や自然等の楽しみ方を再認識することを重視すべき、という結論に

至った。

こうした議論になった背景には、2012年度に本研究室とナショナルトラストが共同で浜中町民を対象に実施したアンケート調査において、地元の霧多布湿原で余暇を過ごす住民が少ないということが判明し、その結果から、地元住民が町内の自然等に触れたり、楽しんだりする機会が少ないのではないか、と考えたことがある。

#### 4.2. 浜中町での調査活動

一方で、浜中町では、JA浜中町が中心となり、新規就農者の受け入れ、研修等に力をいれており、全国各地から特に酪農業を始めたい比較的若手世代の人材が多く集まるようになり、2010年時点で同JAの組合員世帯の約15%（28世帯）が新規就農者で占められるという状況に至っている。学生たちは、これまで浜中町に訪問した際に、そうした新規就農者の中の少なくない人たちが、浜中町内において仕事の空き時間等にカヌーや釣り、スノーモービルといったレジャーを楽しんだり、地域づくり活動に積極的に参加していたりする現場を見ていることから、改めて、そうした新規就農者の生活や仕事等の日常を見たり、声を聞いたりすることが、上記の課題を考える上で重要なのでは、という議論になった。

そこで、まずはJA浜中町の新規就農者の受け入れ・育成システムの実際について詳しく知るとともに、研修を受けている就農希望者の声を聞くことを目的に、ナショナルトラスト職員の案内で、2013年10月下旬にJA浜中町と(有)浜中町就農者研修牧場を訪問し、関係者にインタビューを行った（写真2）。



写真2 就農者研修牧場での調査

次に、新規就農者をはじめとする浜中町内の酪農家の日常を知ると同時に、そうした方々の浜中町での生活や仕事に対する考えなどについて、じっくり時間をかけて話を聞くことを目的に、11月初旬に民泊体験調査を実施した（写真3）。こちらにもナショナルトラストの仲介・連絡調整のもと、酪農家1戸あたり学生が2名ずつ宿泊し、夕方と早



写真3 民泊体験調査

朝に行われる各酪農家宅の農作業の手伝いをし、残りの時間は、受け入れ先の酪農家の家族との食事づくり、子どもとの遊びなどを通じた交流を図りながら、インタビューを行った。なお、受け入れ酪農家4軒中の3軒は新規就農世帯、1軒は新規就農者ではないが、長年民泊受け入れやグリーンツーリズムに積極的に取り組んでいる酪農家世帯であった。

インタビューでは、主に浜中町に来て酪農業を始めた経緯や理由、地域社会での暮らしや酪農業という仕事に対する考え、さらには食や生命などに対する想いなどについて、受け入れ先の家族から話を聞いている。

民泊終了後、学生たちは再度霧多布湿原センターに集まり、ナショナルトラストの職員も参加のもと、民泊の感想、インタビューで得られた情報等の共有を図った上で、今後の研究の進め方について確認し、民泊調査を終了した(写真4)。



写真4 ナショナルトラスト職員を交えた意見交換

#### 4.3. SCANにおける中間研究発表

その後は、大学において民泊調査によって得られた情報について学生間で議論を重ねながら整理し、中間研究発表

の準備作業を進めた。そして、2013年11月30日に開催されたSCAN第4回合同研究発表会(11月30日)において、研究発表(研究題名:「私たちが提言する——みんなをHAPPYにするサステナブルツーリズムin浜中」)を行った(写真5)。



写真5 SCANでの発表

研究発表の概要をまとめると以下の通りである。

- ①浜中町では、地域に愛着を有する住民が多い一方で、地域づくりの担い手が不足している、地域の未来はどちらかというと明るくないと考えている若者が多いなど、地域社会に不安を抱えている住民は少なくない。
- ②今後、浜中町の地域資源を活用した地域づくりを進めていく必要があるが、まずは地域資源の活用の仕方について発見する場が必要である。そして、それは地域内の人と外の人が共同で行うことが求められる。浜中町で考えられる取り組みは多様であるが、本研究は、酪農地域をフィールドにして、解決のヒントとなる取り組みについて考えることをテーマにする。
- ③上記テーマについて考察するために、本研究室では、NPO法人霧多布湿原ナショナルトラストと連携して、民泊体験や地元高校でのワークショップ、イベントへの参加などを通じた現地調査を重ねてきた。
- ④調査の結果、生まれた時から浜中町内に住んでいる住民からは、「同町の魅力には気付いているが、それが当たり前であるというように感じている」、「地域づくり活動についても自分たちから始めるというよりも、誰かがやっていて楽しそうだと感じたら参加する」、といった声が聞かれた。
- ⑤一方で、浜中町では、新規就農者の受け入れを積極的に進めるために、全国的に見ても先進的な取り組みを行っており、それにより、全国から新規就農者が移住してきている。そうした人々からは、「浜中の自然等で楽しみながら生活しようとしている人が少なくない」、「ただ、個別に楽しむ傾向が強く、そうした活動をまとめようとする存在は少ないかもしれない」、といった意見が聞か

れた。

- ⑥そこで、地域住民が地域資源の楽しみ方を見出すこと、さらに地域づくりの担い手として、特にさまざまな人材をつないでいく「コーディネーター」を創出すること、浜中町のPR、特に新規就農者受け入れの仕組みなどを広めていくこと、などが今後重要になる。よって、本研究では、地域の多様な主体が参加した観光地域づくり活動（サステナブルツーリズム）について提案を行う。
- ⑦サステナブルツーリズムは、エコツーリズムやグリーンツーリズムなどの概念を統合したもので、環境保全、地域の社会経済の維持・発展、持続可能性などへの貢献を意識した観光に関する考え方、実践などを指している。
- ⑧このようなツアーの企画・運営に地域の様々な関係者も参加し、訪問客として訪れる地域外の人々と交流していくことを通じて、地域外の人に対して浜中町をPRするだけでなく、地域内の人にも地域の魅力や楽しみ方を再認識することを目指す。
- ⑨具体的には、北海道外の大学生を対象にした夏と冬のツアーを提案する。主に、酪農地域の廃校でのキャンプ、サイクリング、酪農家宅での民泊体験、牧場や湿原をフィールドにしたスキー等のアウトドア体験などからなる。
- ⑩ツアーの企画運営には、大学生（教育大生）、ナショナルトラスト関係者だけでなく、地元の高校生にも参加してもらう。高校生に参加してもらうことにより、地域の魅力・楽しみ方を知ってもらうとともに、将来の地域づくりの担い手育成にもつながることが期待される。

この研究発表に対して、他大学の教員、弁護士などからなる講評者からは「人に焦点を当てたユニークな研究」、「現場に何度も足を運び調査を重ねている点が評価できる」、「住民の生の声を多く集めている点がよかった」といった評価を受けた。一方で「地域社会における自分たち大学生の立ち位置をもっとはっきりさせるべきなのは」、「住民の本音の部分をもっと引き出すことができるのでは」、「学生自身も地域の多様な人材・組織の間をつなぐ役割を果たせる可能性がある。その立場として地域に積極的に入ってほしい」、「（ツアーで提案しているサイクリングなどについて）安全性の面の検討も必要なのは」といった、今後検討することが必要な課題の指摘も受けた。

## 5. 最終発表までの活動過程

先述の民泊調査を実施する頃まで、学生たちは、研究成果としての提言発表を行うこと以外については、特段の取り組みは検討していなかった。しかし、浜中町での調査研究活動を重ね、SCANに向けた研究発表をまとめていくにつれて、徐々に学生の間では、浜中町に対して提言を行う以上、その内容について自分たちで実践するところまで責任をもって行わなければならないのでは、という意見が出始めた。そして、SCANでの研究発表を終えた頃には、提

言を行った後もツアーの実現に向けて取り組みを継続することについて、学生の間ではほぼ合意が形成された。

そこで、SCANでの研究発表を終えた後の最終研究発表に向けた作業においては、ツアー実行に向けた準備も意識した取り組みも同時に行われることになる。そのひとつとして、将来の地域づくり活動の担い手と期待される地元の高校生と意見交換を行い、ツアー案にアイデアを取り入れるとともに、ツアーの企画運営への参加の呼びかけを行うことを目的に、2014年1月24日に霧多布高校においてワークショップを開催することになった。

ワークショップ実施に当たっては、筆者から同高校に対して協力を依頼し、実施前には先述の浜中担当の教諭に釧路校までお越しいただき、学生との間でワークショップの進め方等について打ち合わせを行った上で実行する運びとなった。

ワークショップには、霧多布高校の1年生18名に浜中大学の授業の一環として参加していただいた（写真6）。まず、大学生側から、主にSCANで発表した内容をベースにした研究発表ならびにツアー案の紹介を行い、その後、3班のグループに分かれ、それぞれに大学生が進行役として入り、ワークショップを進めていった。ワークショップでは、高校生に浜中町で町外の人に紹介したい場所や店などを思いつく限り自由に出してもらい、それをベースに観光ツアー案を作成し、最後にそれを全体で発表、共有する、という流れで進めた。



写真6 霧多布高校でのワークショップ

高校生からは、無人島や映画のロケ地、地元住民向けのラーメン店などを巡る浜中町隠れ名所ツアーや、鹿肉加工を行っている牧場の訪問・見学、湿原での星空観察、高台からの市街地の夜景見学、魚のつかみ取り、といった企画が提案された。

ワークショップ終了後、霧多布高校の教諭からは、「大学生の研究発表の内容は高校生にとっては難しかったかもしれない。しかし、大学生の研究発表を聞いたり、大学生と議論できる機会はこれまでほとんどなかったため、とて

もいい刺激になったのではないだろうか」, 「普段の授業と比べて高校生の目の色が違っていたように感じた」, といった感想を頂いた。また, ワークショップ終了後, 参加した高校生のうちの数人からは, 「実際にツアーを実施するにはぜひ参加したい」, という声があがった。

そして, 一連の研究活動の最終成果発表として, 2014年2月24日に霧多布湿原センターにおいて研究発表・意見交換会を開催した。当日は, ナショナルトラストの職員, 理事長や理事などの役員のほか, 民泊を受け入れていただいた酪農家, 霧多布高校の教諭などに出席いただいた(写真7)。



写真7 最終研究発表・意見交換会

まず, 学生側から, 霧多布高校でのワークショップで出た意見を追加して完成させた研究の発表を行い, その後, 出席者との質疑応答, 最後に今後のツアー実現に向けた意見交換を行った。出席者からは, 「民泊調査等において学生からいろいろ質問をされることで, 地域の現場で活動に取り組んでいる側も, 改めてなぜこのような活動を行っているのか考える, いい機会になった」, 「(学生には) 来年度以降もこの活動をぜひ続けて, ツアーを実現させてほしい」, 「学生が間に入ることによって, これまで同じ町内でも付き合いが希薄だった異業種の住民同士が連携できる可能性があるので, ぜひ学生には今後も地域の多様な主体と一緒に参加できる機会を作ってほしい」といった意見, 感想が出された。また, ツアーに対して出席者からは, 海での地引網体験, 昆布干し, 牛乳加工, 牧場での星空観察など, 具体的な活動が数多く提案された。

## 6. まとめ

2013年度の本研究室3年生による浜中町での研究活動は上記の最終研究発表会をもって終了した。引き続き2014年度も, 4年生となった学生たちが中心となる形で, 提言をもとにしたツアーの実現に向けた企画, 準備等を進めている状況にある。

本稿で記述した2013年度の活動においては, 先述したように, 中間段階と最終段階での研究発表の実施等については事前に決めていたが, それ以外のテーマ設定や調査研究の手法等に関しては基本的に研究室所属の学生間の検討に委ねる形をとった。その結果, 民泊調査, 高校生とのワークショップ, ツアーの実践, 等のアイデアが学生側から相次いで出された。

一連の研究発表や霧多布高校でのワークショップなどの模様は, 北海道新聞, 釧路新聞などの地元紙に記事が掲載されるなど, 地域でも一定の注目を集めた。また, 一連の活動が評価され, 2013年12月には「釧路しんきん地域貢献助成制度・学生研究奨励賞」(主催: 釧路信用金庫) を受賞した。

本稿第1章で紹介した津曲の論述にもあるように, サービスラーニングでは, 学生が地域社会・企業で単に学ぶだけではなく, 地域・企業側にとっても学生と協力関係を結ぶことで何らかのメリットを得る, 互惠関係が生まれることが重視されている。霧多布高校でのワークショップや最終研究発表会の参加者から出た感想・意見であるが, 高校生にとって大学生と議論・交流を行う機会をもつことができ刺激になった, 住民にとって学生から質問されることが自分たちの活動の意味等を振り返る機会になった, 学生が入ることで地域内の異業種間で連携できる可能性を感じた, といった声があがったように, 学生が浜中町内で行った研究活動によって, 現時点では地域全体から見れば実にささやかではあるが, 地域づくりの推進に何かしらの貢献ができたと考えている。今後も, 大学生による地域における研究活動が, 地域社会の諸課題解決にいかなる貢献ができるのか, さまざまな実践を試みながら考えていきたい。

今回の研究活動では, 特に地元の霧多布高校と連携した取り組みを盛んに行うことができた。近年, 大学と高校との連携, いわゆる「高大連携」に対する注目が高まっている。現在のところ, 高大連携に関する具体的取り組みで多く見られるのは, 大学教員が高校で出前授業をしたり, 高校生が大学を訪問・見学するような形態である。しかし, 今回の本研究室と霧多布高校が実施した取り組みは, 大学生が高校生に対して, 大学での日頃の研究成果を紹介したり, 両者が意見交換・交流を深めるといったものであり, これまでの高大連携で多く見られた活動とは一味違った実践事例であったと考えている。

大学生にとっては, 大学での日頃の研究成果を大学以外で発表する機会も多くなく, しかも自分たちより年下の世代を前に発表することもあまりないため, 普段の研究発表よりも緊張感・責任感をもって取り組むことができたと考えている。

また, 高校生にとっては, 自分たちに身近な世代の大学生の研究発表を聞く機会はおそらく貴重であり, 大学生が大学において実際にどのようなことをしているのか, 研究とは何か, といったことについて, 大学案内等の広報資料を見たり, 大学教員の話の聞いたりするよりもリアリティ

をもって知り、大学進学等への関心をより高める機会にもなったと考えられる。実際に、ワークショップ終了後には、大学生と高校生が自由に会話する時間を設けたが、その際に高校生からは大学生に対して、大学での生活に関する質問が数多く寄せられている。

今後、浜中町でのツアー実現に向けた企画・準備過程においては、高校生の参加も得て、連携しながら取り組みを進めていくことを予定しており、その間には意見交換等を行う機会をさらに何度か設けていくことを計画している。これらの取り組みを基盤に、霧多布高校との協力関係をさらに発展させ、高大連携に関する多様な活動を実践していきたいと考えている。

最後に、本研究室が浜中町においてこのような研究活動を展開してきた背景については、ナショナルトラストの存在を抜きに論ずることができない。ナショナルトラストの担当職員には、浜中町内での調査の多くにご同行いただいただけでなく、頻繁に学生たちとの意見交換にも参加していただき、調査研究活動の進め方や研究の取りまとめに対して何度も的確な助言を受けた。さらには、浜中町での多様な人物・組織を対象にしたインタビューや酪農家宅での民泊調査、最終研究発表・意見交換会の実施にあたっては、町内関係者との間の仲介・連絡等を行う役割を担っていた。

このような地域の多様な人物・組織との細かな交渉、調整等を大学教員や学生のみで行うことは困難である。日頃から同町内で地道に環境保全・地域づくり活動を展開し、そうした各主体との信頼関係、ネットワークを構築しているナショナルトラストであるからこそ担うことが可能である役割であった。そうした意味で、ナショナルトラストは、共同研究者・助言者という立場だけにとどまらず、大学と地域社会の間の橋渡し役、コーディネーターとしての役割を果たしていただいたと考えている。

今後、大学が地域をフィールドにした教育研究活動を展開していく上では、こうした地域側の窓口となるコーディネーター役の存在が不可欠であり、大学としても日頃からそうした役割を担う組織等との関係を強化するだけでなく、必要に応じて適切な支援を行っていく必要がある。

本研究室における浜中町での調査研究活動は、地域の課題解決に貢献する教育研究活動という観点からは、まだ中途段階にあり、具体的な成果や課題を述べることはできる状態にはない。今後の研究活動の経過についても、適宜取りまとめ、公表していく予定である。

## 付記

本研究室による浜中町における教育研究活動にいつも快くご協力いただいている霧多布湿原ナショナルトラストをはじめとする同町内の関係各位に対して厚く御礼を申し上げます。

## 注

- (1)本稿で紹介する研究活動は、科目名「地域社会と環境演習Ⅰ」、「環境教育活動ⅢD」の一環として実施した。
- (2)これに関連する概念として、宮前耕史ら(2012)が小学校等の教員が地域社会に関わる際に求められる志向性や職能として提唱する「地域創造型マインド」がある。地域創造マインドとは、地域社会の持続可能性などに関する志向性や価値や文化の再創造、地域資源としての教育という視座、協同的实践におけるフォロアシップなどに関する職能等のことを指している。
- (3)本節の記述は、平岡(2013)の内容に修正を加えたものである。
- (4)現在の組織名称には2011年に変更している。
- (5)例えば、鈴木ほか編(2001)、小島ら編(2011)、敷田ほか(2009)など。
- (6)事業名称「ビジターセンターが核となったへき地活性化環境教育プロジェクト」。本事業は、文部科学省・平成24年度「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」における実証的共同研究の財政支援を得て実施された。
- (7)同学生は浜中町出身で、中学・高校生時からナショナルトラストの活動にボランティアに参加していたという経歴も有している。

## 文献

- 浜中町, 2010, 『はまなか町勢要覧』。
- 平岡俊一, 2013, 「北海道浜中町における環境まちづくりに関連する地域住民の意識・実践の現状と課題」『北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編』64(1):1-10。
- 霧多布湿原ナショナルトラスト, 2014, 『認定特定非営利活動法人霧多布湿原ナショナルトラストの指針』。
- 宮前耕史・添田祥史, 2012, 「地域に根差した教師養成のためのプログラム開発——「地域参加型マインド」から「地域創造型マインド」へ」『釧路論集:北海道教育大学釧路校研究紀要』(44):19-26。
- 小島廣光・平本健太編, 2011, 『戦略的協働の本質—NPO, 政府, 企業の価値創造』有斐閣。
- 敷田麻実・木野聡子・森重昌之, 2009 「観光地域ガバナンスにおける関係性モデルと中間システムの分析—北海道浜中町・霧多布湿原トラストの事例から」『日本地域政策研究』(7):65-72。
- 鈴木敏正・伊東俊和編, 2001, 『環境保全から地域創造へ—霧多布湿原の町で』北樹出版。
- 津曲隆, 2013, 「サービスラーニング評価のための分析枠組みに関する考察」『アドミニストレーション』19(2):101-126。